

# あきたからの米レター

**令和4年産水稻 作況指数「96」、作柄「やや不良」**

**地帯別作柄の良否 県北・中央・県南ともに「やや不良」**

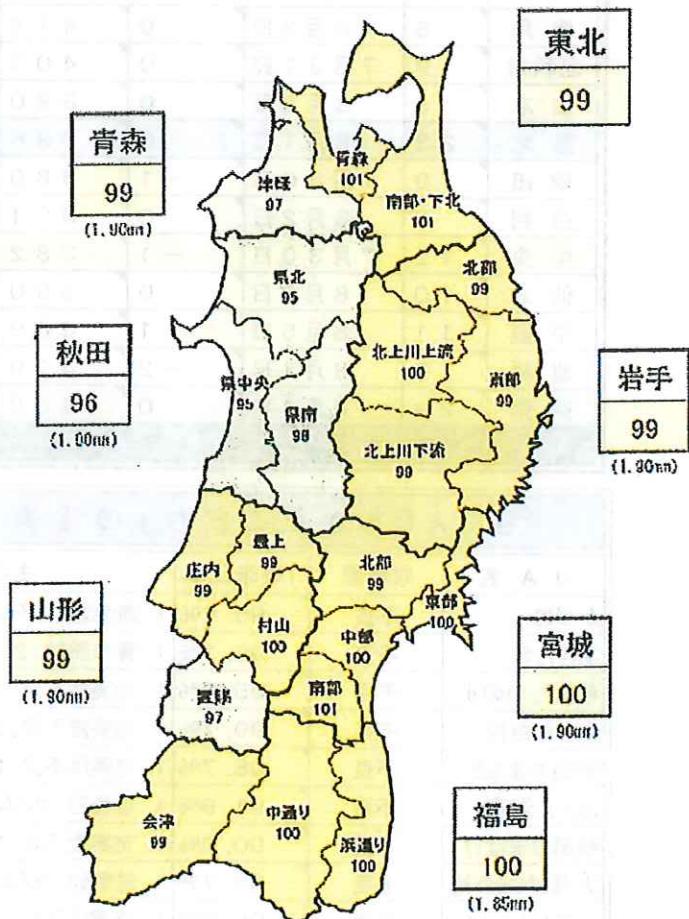
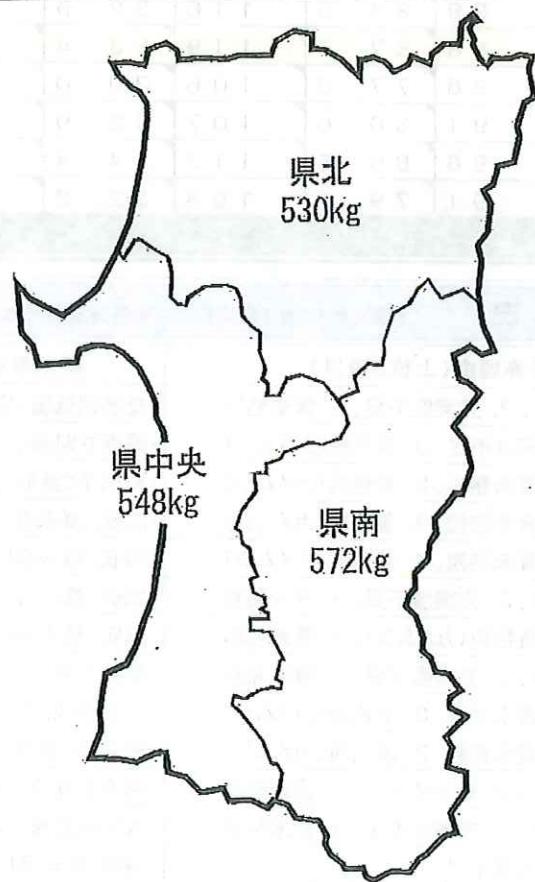
**秋田県の10a当たり平均収量は555kg**

令和4年9月25日現在  
農林水産省東北農政局

農林水産省東北農政局は、9月25日現在における秋田県の水稻の作柄は「やや不良」、作況指数「96」が見込まれると発表した。これは、穂数が「やや少ない」、1穂当たり粒数が「やや多い」、全もみ数(穂数 × 1穂もみ数)が「やや少ない」となり、出穗期以降の登熟の良否は「平年並み」に推移している。このことから、10a当たりの予想収量は555kg(ふるい目幅1.70mm)が見込まれ、前年に比較して36kg少なくなっている。全もみ数の減少は、6月上・中旬の低温と日照不足により分けづ抑制され、穂数が「少ない」ことによるものとしている。9月時点で「やや不良」となったのは、平成30年以来、4年ぶりである。地帯別作柄の良否は、県北、中央、県南ともに「やや不良」、作況指数は県北と中央が「95」、県南は「98」であった。

**秋田県の10a当たり平均収量555kg  
作況指数「96」、作柄「やや不良」**

令和4年9月25日現在  
農林水産省東北農政局



**東北6県の地帯別作況指数  
令和4年9月25日  
農林水産省東北農政局**

区分	作柄の良否 (作況指数)
平年並み (96~99)	
やや不良 (86~95)	

# 総穂数平年並み

穂数少なく・1穂穂数多い、地域差・ほ場間差大きい

1穂穂数の多いほ場は登熟向上を図る水管理が肝要

8月19日に行った各地域振興局農林部農業振興普及課定点ほ場の「あきたこまち」の生育調査では、全県平均でみると、出穂は8月1日(平年差-1日)でほぼ平年並みになっている。穂数は399本/m<sup>2</sup>(平年比88%)、1穂着粒数は82.5粒(同114%)、総穂数32.8千粒/m<sup>2</sup>(同100%)である。穂数が少なく、1穂着粒数が極端に多いことに加えて、出穂前後は雨が多く、日照時間の少ない日が続いたことから、初期登熟は緩慢である。また、出穂はほ場間内、株内のバラツキが大きく、今後は早期落水防止など登熟の向上を図る水管理の励行と、品質・食味を落とさない適期刈り取りが重要となる。

## 農業振興普及課定点調査結果

(令和4年8月19日調査、品種:あきたこまち)

農業 振興 普及課	調査 点数	出穂期		穂数		着粒数			
		本年 (日)	平年差 日	m <sup>2</sup> 当たり		1穂当たり		m <sup>2</sup> 当たり	
				(本)	(%)	(粒)	(%)	(千粒)	(%)
鹿角	5	8月2日	0	414	85	78.3	117	32.4	100
北秋田	9	7月31日	0	403	86	81.2	117	32.5	100
山本	9	8月2日	0	380	84	89.2	120	33.8	101
県北	23	8月1日	0	396	85	83.7	118	33.0	100
秋田	10	7月30日	-1	380	87	88.5	119	33.6	104
由利	2	8月2日	0	391	89	83.5	116	32.5	104
中央	12	7月30日	-1	382	88	87.7	119	33.4	104
仙北	10	8月2日	0	390	86	77.3	106	30.0	92
平鹿	11	8月5日	1	409	91	80.6	107	32.9	98
雄勝	8	8月1日	-2	429	96	80.5	112	34.4	107
県南	29	8月1日	0	408	91	79.5	108	32.3	99
全県	64	8月1日	-1	399	88	82.5	114	32.8	100

## 各JA「あきたこまち」の生育概況

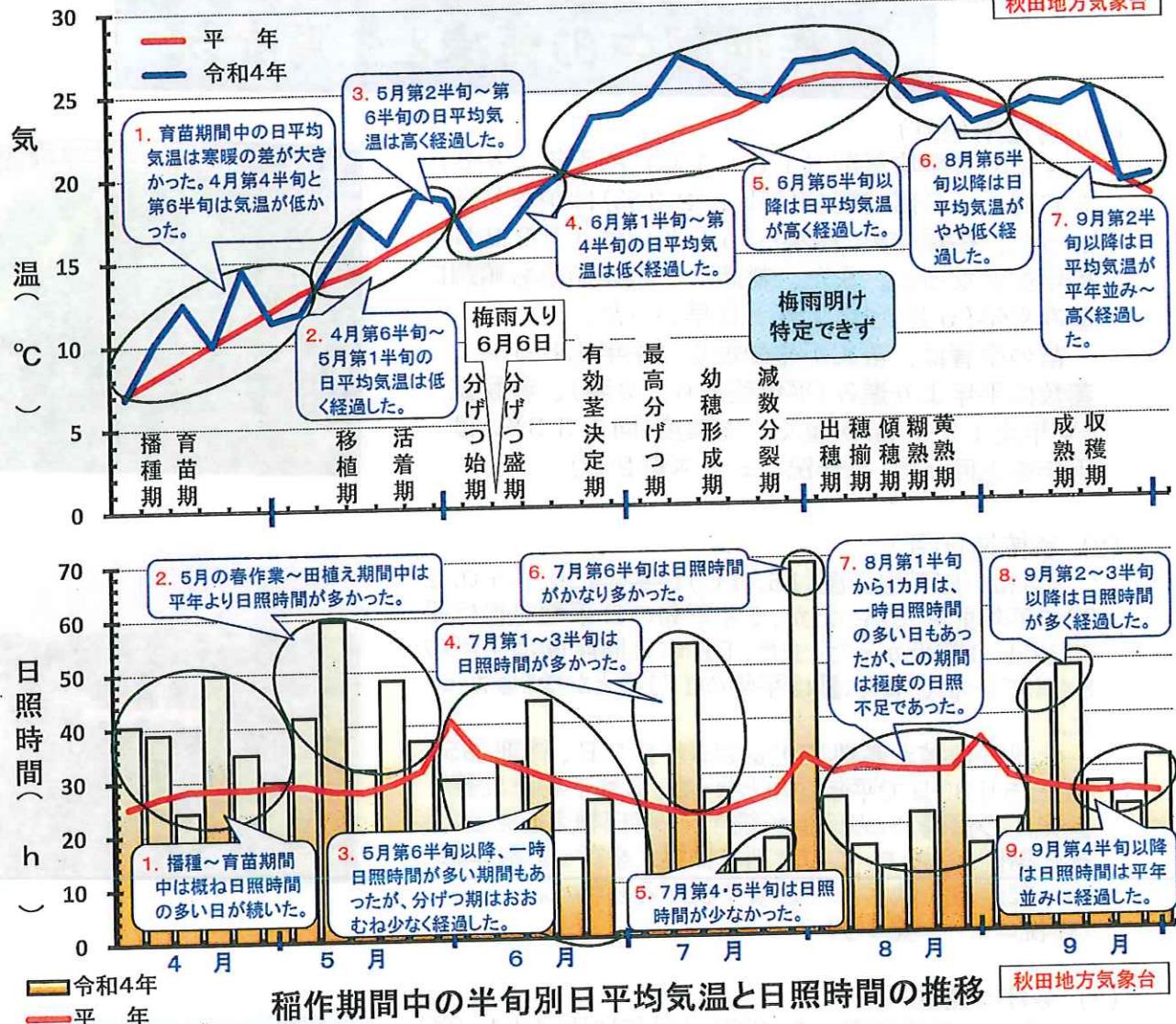
(令和4年10月7日現在、達観調査及び聞き取り)

J A 名	収穫量	1等米比率	主な落穀理由(上位3項目)	特記事項
かづの	不良	95.9%	1. 着色粒(カメムシ)、2. 充実度不足、3. 青未熟粒	・登熟期低温で減収
あきた北	不良	96.1%	1. 青未熟粒、2. 充実度不足、3. 着色粒(カメムシ)	・降雨で刈遅れ
秋田たかのす	不良	95.3%	1. 充実度不足、2. 青未熟粒、3. 着色粒(カメムシ)	・屑米多く減収、刈遅れ
あきた白神	不良	99.7%	1. 充実度不足、2. 青未熟粒、3. 着色粒(カメムシ)	・減収、屑米多い
秋田やまもと	不良	98.7%	1. 充実度不足、2. 青未熟粒、3. 着色粒(カメムシ)	・減収、屑米多い
あきた湖東	不良	91.9%	1. 着色粒(カメムシ)、2. 充実度不足、3. 青未熟粒	・倒伏・減収、屑米多い
秋田なまはげ	不良	90.0%	1. 充実度不足、2. 着色粒(カメムシ)、3. 青未熟粒	・減収、個人差大きい
大潟村CE公社	不良	99.7%	1. 着色粒(カメムシ)、2. 充実度不足、3. 青未熟粒	・登熟不良による減収
秋田しんせい	不良	98.9%	1. 充実度不足、2. 青未熟粒、3. 着色粒(カメムシ)	・一部倒伏、刈遅れ
秋田おばこ	不良	98.9%	1. 充実度不足、2. 青未熟粒、3. 着色粒(カメムシ)	・屑米多く減収、刈遅れ
秋田ふるさと	不良	97.7%	1. 着色粒(カメムシ)、2. 充実度不足、3. 青未熟粒	・倒伏目立つ、減収
こまち	不良	96.8%	1. 着色粒(カメムシ)、2. 充実度不足、3. 青未熟粒	・大規模農家で刈遅れ
うご	不良	98.6%	1. 青未熟粒、2. 充実度不足	・減収・屑米多い

## 令和4年 秋田米产地情報 [第7号:令和4年10月17日]

JJA全農あきた米穀部

秋田地方気象台



### 刈り取りの進捗状況

地域振興局	作付け面積(ha)	始期(5%)		盛期(50%)		10月15日(%)※		終期(95%)	
		本年	平年差	本年	平年差	本年	平年	本年	平年差
鹿角	2,186	9月27日	0	10月9日	0	72.7	79.1	—	—
北秋田	6,875	9月21日	-1	10月2日	1	85.1	96.4	—	—
山本	8,766	9月22日	2	10月2日	2	94.4	97.4	10月16日	—
県北	17,827	9月21日	-1	10月2日	1	88.2	94.8	—	—
秋田	22,465	9月18日	-1	9月30日	2	88.5	97.8	—	—
由利	8,170	9月21日	-1	10月2日	1	90.2	96.8	—	—
中央	30,635	9月20日	0	10月1日	1	88.9	97.5	—	—
仙北	19,340	9月21日	1	9月30日	1	95.0	98.1	10月15日	5
平鹿	11,100	9月25日	2	10月3日	2	96.8	98.0	10月13日	2
雄勝	5,867	9月19日	-4	9月30日	-2	97.2	95.8	10月13日	2
県南	36,307	9月21日	0	10月1日	0	95.9	97.7	10月15日	4
全県	84,769	9月20日	-1	10月1日	0	91.8	97.0		

※: 10月15日の刈り取り面積(刈り取り面積/作付面積×100)

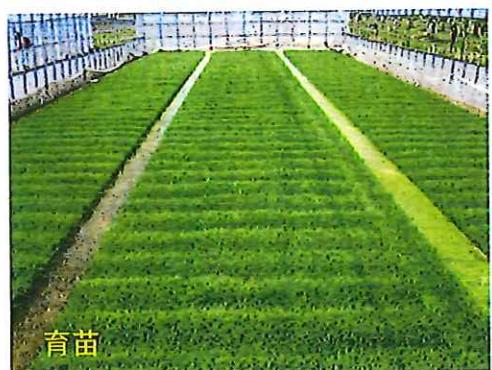
—: 10月15日現在の刈り取りが終期に達していないことを表す

## 稲作期間中の気象と生育概況

### (1) 育苗期(4月)

4月の日平均気温(10.1°C)は平年より0.5°C高く、日照時間(平年比123%)はかなり多かった。播種作業の盛期(50%)は4月22日で平年並となった。また、耕起などの春作業も順調に進み平年(5月3日)より1日早かった。

苗の生育は、苗丈がやや短く(平年比86%)、葉数は平年より進み(平年差+0.3葉)、乾物重(平年比117%)が重く、充実度(同133%)は平年を上回った。(作況ニュース第2号)



育苗

### (2) 移植期(5月)

5月は、日平均気温(15.4°C)が平年に比べ+0.2°Cで平年並みであったが、5月下旬の日平均気温は平年より1.1°C低かった。また、5月の日照時間は平年の84%で少なく、降水量は平年の171%とかなり多かった。

全県の田植え盛期(50%)は5月22日、終期(95%)は5月30日で平年並みとなった。5月下旬は前線と低気圧の影響により低温が続き、一時田植えを見合わせた期間があった。この時期に田植えを行った沿岸部の一部地域で代枯れや活着不況がみられた。

(作況ニュース第3号)



田植え

### (3) 分げつ期(6月)

6月の日平均気温(20.8°C)は平年に比べ+1.2°C高く、日照時間243.2hは平年に比べてかなり多く、降水量は平年(76.0mm)より少なかった。「梅雨入り」は平年並みの6月6日であった。

分げつ始期(6月10日)の生育は、6月上旬の低温と日照不足の影響により、草丈は25.5cm(平年比101%)、m<sup>2</sup>当たり茎数は115本(同74%)と極端に少なく、葉齢は5.9葉(平年差-0.2葉)であった。

(作況ニュース第3号)

有効茎決定期(6月25日)の生育は、草丈は37.6cm(平年比103%)、m<sup>2</sup>当たり茎数は388本(同94%)、葉齢8.9葉(平年差+0.3葉)で遅れていた生育は回復しつつあった。しかし、5月下旬に田植えを行った一部の地域では生育の遅れが目立った。(作況ニュース第4号)



活着

### (4) 最高分げつ期～減数分裂期(7月)

7月の日平均気温(26.0°C)は平年に比べかなり高く(+2.6°C)推移した。日照時間(259.4h)は平年の



講習会

173%でかなり多く、降水量は平年(平年比127%)より多かった。

最高分げつ期(7月5日)の生育は、草丈が51.5cm(平年比104%)、m<sup>2</sup>当たり茎数548本(同101%)葉緑素計値43.9(同99%)、葉齢10.3(平年差+0.3葉)であった。

幼穂形成期(7月15日)の生育は、草丈が66.3cm(平年比106%)、m<sup>2</sup>当たり茎数532本(同99%)葉緑素計値41.7(同99%)、葉齢11.4(平年差+0.4葉)であった。

減数分裂期(7月26日)の生育は、草丈が82.4cm(平年比112%)、m<sup>2</sup>当たり茎数482本(同97%)葉緑素計値37.8(同98%)、葉齢12.7(平年差+0.5葉)であった。

最高分げつ期から減数分裂期にかけて高温・多照で経過し、適度な降水に恵まれ、溝掘りや中干しによる水管理が徹底されたが、草丈が急速に伸びたことから穗肥と実肥の追肥を控えたほ場が多くあった。こうした高温・多照は斑点米カメムシ類の生息密度が高まり、防除の徹底と草刈りの実施を呼びかけた。(作況ニュース第6号)



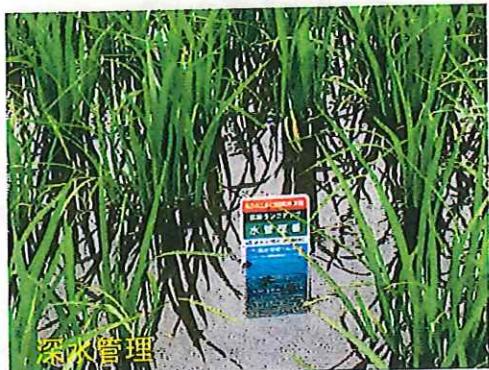
溝掘り作業



溝掘り跡



飽水管理



深水管理



生育調査



開花



黄熟期

## (5) 出穂期(8月上旬)

6月下旬から8月上旬まで続いた高温・多照は、生育を早め、「あきたこまち」が誕生して以来、過去に経験したことのない早さで出穂期(8月1日)を迎えた。

(作況ニュース特号)

東北農政局秋田拠点が発表した作柄概況でも、出穂最盛期(50%)は8月1日で平年より4日早まった。

## (6) 登熟期(8月中旬~)

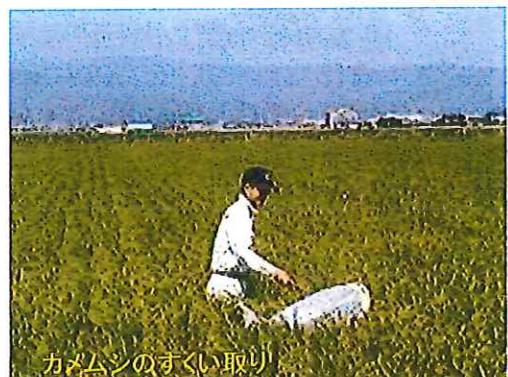
8月の日平均気温(25.5°C)はほぼ平年並み(平年比+0.5°C)に推移した。日照時間(158.9h)は平年比85%と少なく、降水量(172.5mm)は平年比93%で平年並みであった。登熟中・後期の日平均気温は平年並みに推移したが、日照時間が極端に少なく、登熟歩合と粗玄米千粒重が一時鈍化した。

8月20日の生育は、m<sup>2</sup>当たり穂数は452本(平年比102%)、1穂当たり着粒数は74.7粒(同1

0.2%）、m<sup>2</sup>当たり総粒数は33.6千粒（同103%）であった。（作況ニュース第7号）

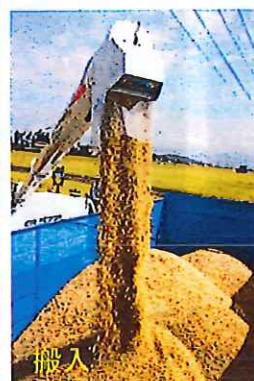
#### (7) 病害虫の発生

病害虫防除所が8月上旬に調査した結果では、穂いもちの発病株率と発病地点率は平年並みであったが、県南部ではやや多かった。また、斑点米カムシ類は6月中旬から8月上旬まで高温・多照で経過したことから、水田内のすくい取りの発生地点率は平年に比較していずれも多かった。



#### (8) まとめ

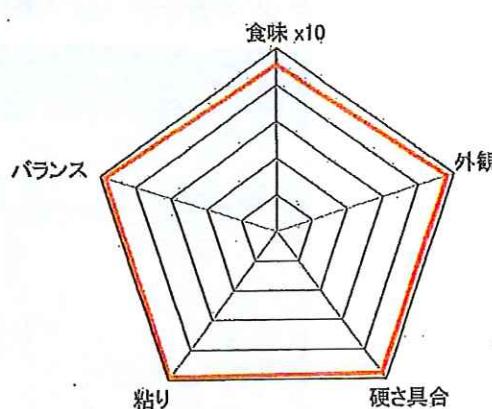
今年の気象は、播種から刈り取りまで気象変動が非常に大きかった。6月上・中旬の低温と日照不足、6月下旬～8月上旬までの高温・多照、8月中旬～9月上旬の大暑と極度の日照不足など、観測史上記録的な気象で経過した。こうした天候にもかかわらず、生産者の弛まない水管理により、9月25日の作柄は「やや不良」にとどまった。集荷された玄米の品質は良好、炊き上がりは適度な「粘り」があって「うま味」が凝縮され、自信を持って消費者にお届けできるおコメに仕上がっている。



#### サタケ 炊飯食味計 分析結果【出荷製品】

整理No. 00027981

日付 2022年09月28日(水)



STA	
外観	9.6
粘り	9.8
バランス	9.7
硬さ具合	4.8
食味	91

年 産	4
産 地	秋田
品 種	あきたこまち
水 分	13.9 %
白 度	46.9 %
精 米 日	9.26
備 考	調査品



## あきたecoらいすの拡大に向けた取り組み

あきたecoらいす (農薬50%以上削減)		JA秋田 こだわり米	減農薬栽培米 スタンダード 基準	一般栽培米
有機米	特別栽培米			

「あきたecoらいす」とは使用農薬成分回数を50%以上削減した、環境にやさしい秋田米づくりの総称

JAGループ秋田は、秋田県、生産組織等と一体となり、「あきたecoらいすプロジェクト」を立ち上げ、環境保全に取り組んだ新たな「秋田米ブランド」を構築します。

## 京急あきたフェア2022 「あきたecoらいす」応援プロジェクト



JA全農あきたは、京急電鉄株式会社と共に、秋田県産農産物を首都圏に売り込む企画として「京急あきたフェア」を行っており、今年で14回目を迎えた。5月26日に京急グループ社員と秋田県立大曲農業高等学校の生徒を迎え、大仙市高梨地区の農事組合法人北川目ファームで田植えを行った。本年は大雨と日照不足により生育が心配されたが、黄金色の稲穂がたわわに実り良い出来秋を迎えた。JA秋田おばこ及び同東部営農センターの指導員とJA全農あきた職員等による久しぶりの稻刈りに歓声が上がった。収穫された「あきたこまち」の「あきたecoらいす」は10月10日から京急百貨店、同ストア・スーパー等で販売する。



# 新米出荷セレモニー

令和4年10月4日

## 「秋田県産あきたこまち」県外に向け初出荷！！

10月4日、JA全農あきたは令和4年産米「あきたこまち」を県外に向けて初出荷した。JA全農あきた運営委員長斎藤一志会長らがテープカットを行った後、ミスあきたこまちからドライバーに花束を贈呈し、関係者が拍手でトラックを送り出した。この日は関東地区に向けて12トン、翌日からは首都圏や中京圏等に向けて順次出荷が続く。斎藤会長は、「今年は局地的な豪雨など気象変動の多い年であったが、生産者の努力により美味しい新米ができた。米の消費回復のためにも、一口でも多く召し上がって頂きたい」と話した。



### 精米の品質分析

- 白度は39.0～41.0で平年並み
- 胚芽残存率は15.0～18.0%で平年並み
- 粉状質粒・碎粒は平年並みでほとんど無い
- 食味(成分分析計、炊飯食味計、官能試験) 炊飯米はつや、適度な粘りを有し、平年に比較しても良食味。「あきたこまち」の特性であるもちもち感が高い。 米穀部精米センター

8月の県北・中央部を中心とした記録的な大雨と、極度の日照不足から2カ月が過ぎた。10月15日現在、こうした地域ではいまだに稲刈りの終期(95%)を迎えていない。すでに、登熟に必要な日平均気温15°Cと、日最低気温10°C以下になっており、収穫作業は大幅に遅れている。

農林水産省東北農政局が10月14日に公表した9月25日現在の10a当たり予想収量(ふるい目幅1.70mm)は555kg、作況指数「96」、作柄は「やや不良」と発表した。東北6県の中で唯一「平年並み」を下回る作柄であった。9月時点で「やや不良」となったのは、平成30年以来4年ぶりである。地帯別作況指数は県北と中央が「95」、県南が「98」で、いずれも作柄は「やや不良」、10a当たり予想収量は県北530kg、中央548kg、県南572kgと発表した。生産者等が使用しているふるい目幅(1.90mm)で選別した10a当たり予想収量は、県北499kg、中央511kg、県南543kg、県平均では522kgであった。

稲刈りが終わった田んぼには、緑色の「ひこばえ」が目立ち、稲作期間中の気象に思いを馳せる。今年の気象は、6月上・中旬の低温と日照不足により、分けつの発生が抑制され、穗数不足となったことが最大の要因である。6月下旬～7月は一転して高温・多照に恵まれ、遅れていた生育も回復したかのように見られたが、最高分けつ期が遅れるなど、依然として茎数不足は解消しなかった。7月の高温・多照は生育を早め、出穂は8月1日となり、「あきたこまち」が誕生して以来最も早くかった。初期登熟は7月下旬の高温・多照によって、蓄積したデンプンの転流により順調に推移した。しかし、8月中旬からは一転して大雨と極度の日照不足で経過したことから、登熟は鈍化し成熟期は大幅に遅れた。日平均気温の積算で刈り取りを判断するが、9月下旬に刈り取った米は充実度不足や青未熟粒が多くあった。このため、8月の日照不足を考慮して、5日～1週間遅く刈り取りを始めた生産者が多くみられた。

8月19日に行った各地域振興局農林部農業振興普及課定点ほ場の「あきたこまち」の生育調査では、全県平均でみると、出穂は8月1日(平年差-1日)でほぼ平年並みになっている。穂数は399本/m<sup>2</sup>(平年比88%)、1穂粒数は82.5粒(同114%)、総粒数32.8千粒/m<sup>2</sup>(同100%)である。穂数が少なく、1穂粒数が極端に多くなっている。「あきたこまち」の1穂粒数は70～73粒が理想とされているが、本年は約10粒多い。1次枝梗はほぼ平年並みであったが、2次枝梗の粒数が約10粒多いことから、登熟歩合が低くなったり青未熟粒が多くなる。出穂後は雨が多く、日照時間の少ない日が続いたことから、登熟中・後期は緩慢に推移した。

こうした天候にもかかわらず、生産者の弛まない栽培管理により、収量の減少を最低限にとどめたことになる。集荷された玄米の品質は良好、炊き上がりは「粘り」があって「うま味」が凝縮され、自信を持って消費者へお届けできるコメに仕上がっている。

8月下旬から行った全県のJA稻作営農指導員、実証ほ担当生産者へのほ場巡回・講習会を9月6日に終えた。行く先々で登熟のほ場間差や株内のバラツキがみられ、刈取りの判断が難しくなると不安げであった。温暖化になんでも旧態依然とした栽培管理では対応が難しくなってきている。いかなる気象条件に遭遇しようとも、品質の良い美味しい米の生産を心掛ける必要がある。大豊作とまではいかなくても、少なくとも平年作を目指した稻作期間中の肥培管理に努めたいものである。

こだま

